

になって経済成長に重点化していっている流れがタンザニアやエチオピアでも見られましたが、これはSDGsに逆行した流れだという視点で見ることができます。あるいは、ガーナやナイジェリア、タンザニアの事例では、国内の格差がむしろ拡大し、貧困問題があまり考えられてないということを見ると、確実に取り残される国や地域、人が出てきて、誰1人取り残さないということにはなっていないことが見えてきています。また、紛争と治安、民主主義との向き合い方はかなり複雑な問題も孕んでおり、先ほど藤井先生からご紹介頂いたような、新たな平和構築への試みも見ていく必要があります。アフガニスタンなどは多くの方がご存知かと思いますが、日本の援助の性質として、治安が悪化すると撤退するという性質があります。それ以外にもソマリア、チャド、中央アフリカなどかなり多くの国で共通した問題です。逆に独裁政権への支援を続けることによって独裁的な国家を支援しているのはどうなのか、ということがこの本でも、ギニアビサウ、ベナン、ウガンダを事例として取り上げています。国際協力が貧困と紛争にどう向き合うべきか、特に中東アフリカ編では考察する資料を提供しているのではないかと思います。

#### 阪本（司会）

以上が中東・アフリカ編のご紹介となります。

### —中南米編報告—

#### 阪本（司会）

次に、田巻松雄先生から中南米編のご紹介を頂きます。よろしくお願いします。

#### 田巻松雄（宇都宮大学国際学部教授）



15:25  
田巻松雄（宇都宮大学国際学部教授）

松下冽・田巻松雄・  
所康弘・松本八重子編著  
(12月)  
『日本の国際協力 中南米編  
—環境保全と貧困克服を目指して』  
ミネルヴァ書房

33

## 中南米編の構成

「日本の国際協力」刊行にあたって

はしがき

序章 日本とラテンアメリカ・カリブ諸国

松下洸・田巻松雄・

所康弘・松本八重子編著

### 第Ⅰ部 メキシコ・中米編

解説／所康弘 1 メキシコ／田島陽一

2 グアテマラ／敦賀公子

3 エルサルバドル／笛田千容

4 ホンジュラス／笛田千容

5 ニカラグア／岡部拓

6 コスタリカ／額田有美

7 パナマ／藤岡潔

### 第Ⅱ部 カリブ海地域

解説／松本八重子

8 キューバ／森口舞

9 ジャマイカ／辻 輝之

10 ハイチ／今井達也

11 ドミニカ共和国／三吉美加

12 その他のカリブ海地域／ 鈴木美香

### 第Ⅲ部 アンデス諸国

解説 田巻松雄

ベネズエラ 林和宏

14 コロンビア／福海さやか

15 エクアドル／福海さやか

16 ペルー／小波津ホセ

17 ボリビア／ 宮地隆廣

### 第Ⅳ部 コーノ・スール諸国

解説／松下洸

18 ブラジル／舩方周一郎

19 パラグアイ／磯田沙織

20 ウルグアイ／内田みどり

21 アルゼンチン／Rodolfo MOLINA

22 チリ／安井伸

コラム ラテンアメリカの日系人と日本のODA

スエーデン・アナ

日本の国際協力年表

索引

34

『日本の国際協力 中南米編—環境保全と貧困克服を目指して』の編者の一人としてこの本に関わりました田巻です。よろしくお願いいたします。副題は環境保全と貧困克服を目指してという形にしました。ここで言う貧困という言葉については、前の阪本さんの話とも関係するのですが、格差の拡大というのが非常に顕著な地域であることから、全体的なパイの問題というよりは、格差の問題をメインとして扱っています。それと環境保全を軸に、ODA の役割や今後の課題を語るということを考えました。全体の構成として本書は、メキシコ・中米、カリブ海地域、アンデス諸国、コーノ・スール諸国の 4 つの部から成ります。コーノ・スールとは、南の三角地帯と呼ばれる地域です。この 4 つの地域を、編者 4 名を含む 28 人で取り組んだということになります。それぞれの部には解説があるのですが、この解説については編者の問題意識というのを大事にして執筆いたしました。簡単に紹介しますと、Ⅰ部の所康弘さんはこの地域が最近アメリカとの関係において非常に大きな転換期を迎えているということを軸に書かれております。Ⅱ部をご担当された松本八重子さんは、日本との協力関係というものを軸にカリブ海地域の全体像を描かれました。それからのⅢ部を担当した田巻はアンデス山脈に連なる 5 つの国の歴史や経済、政治というものを少し俯瞰するような話を軸にいたしました。そしてⅣ部をご担当された松下洸さんはコーノ・スール地域の多様な地域統合と自立化を軸に書かれたということでもあります。

編者 4 名で中南米編を作るにあたって、すごく意識してきたことがいくつかあります。本日はそのうちの 3 つをご紹介します。1 つ目は、日本の ODA というやはりアジアに金額的にも大きく向かっているということがあって、ラテンアメリカに対する日本の ODA の認知度は極めて低いことから、あまりよく知られていない日本の ODA が果たしてきた歴史的な役割をできるだけ詳細に具体的に書こうとすることです。2 つ目は、約 200 万人の日系人がこの地域にいるというのは大きな特徴でありまして、この日系人の方々も ODA の存在とか活動において非常に重要な役割を果たしているため、その点をしっかり描こうということ。それから最後に、天然資源とか自然の環境という観点から見ると、この地域は生物多様性の宝庫とも言える地域であります。そういう

ものをいかにして守っていくかという人類的な課題がこの地域では問われています。以上の3点を強く重視しながら編集にあたったということでもあります。



私が書いたところでは、アンデス共同体が創設された頃のこの5カ国の性格を、他の中南米諸国と比較しながら記述しました。それから各国の概要を日本及び日系人との関係、それからそれぞれの国における政治、経済の極めて大きな特徴を軸に展開をするというような構成にいたしました。その上で5カ国に対する日本のODAの全体的な傾向を、先ほど申し上げた認知度が低いということも含めて、具体的かつ詳細に描くということをしました。それから最後にやはり緊急性の高い非常に厳しい状況で生じている 이슈への言及をしました。例えば、コロンビアにおける平和構築、それからベネズエラから生じている大量の難民やその難民を受け入れている近隣諸国、そういった状況や国に対して日本のODAが何をできるのかということを追求したということでもあります。私の報告は以上です。ありがとうございました。

## 阪本（司会）

ありがとうございました。次にペルーに対する援助で、小波津ホセさんご発表をお願い致します。

## 小波津ホセ（CMPS 研究員、早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員）

よろしくお願いいたします。CMPS 研究員と早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員の小波津ホセと申します。私が今回担当をさせて頂いたのは、ペルーに対する援助になります。元々私自身がペルー出身ということもあって、直接的にODAに関わってきたわけではないのですが、色々勉強させて頂いて、今回執筆させて頂く運びとなりました。まずペルーについて、皆さんのイメージはおそらくマチュピチュ、ナスカの地上絵、または政治面で言うと日系人のフジモリ大統領の記憶、知名度があるのかなと思います。

小波津ホセ（CMPS研究員、早稲田大学人間総合研究センター招

## ペルーに対する援助

- ・ 対ペルー援助の60年：継続と断絶
  - 軍事政権、政情不安、治安悪化、経済不況
- ・ ペルーのインフラと自然災害
  - 首都の急激な人口増加、テロ活動による破壊行為、エル・ニーニョ減少、地震
- ・ 社会的包摂の地域格差
  - 首都と地方、国内の貧富格差



「リマ地方政府ウェブ版2020年3月25日ニュース」  
<https://www.regionlima.gob.pe/index.php/noticias/994-distribuyen-agua-potable-en-la-zona-expansion-urbana-santa-cruz-del-districto-de-vegueta>  
より抜粋。最終閲覧日2021.11.29)



蘭田(2019)「2017年度外部事後評価報告書 円借款『リマ首都圏北部上下水道最適化事業(I)』」10頁

実際のところペルーに対する ODA の援助というのは、2018 年で 60 年に達しまして、1958 年から様々な経緯をたどっていて、研修生派遣を皮切りに、1971 年の最初の有償支援、1978 年から開始された無償支援など継続的に行われてきました。1990 年代になって行われたのは、教育でした。2000 年に入ってから 4 つの大きな枠組みの中で支援が行われてきました。それは、貧困対策、社会セクター支援、経済基盤、環境保全というもので、2010 年以降には、それらを改めて整理する形で、3 つの枠組みが検討される段階に入っています。3 つの枠組みというのは貧困削減の格差是正、持続発展のための経済社会基盤の整備、そして地球規模の問題への対処で、これらが実施されています。このような経緯がペルーの支援にはありますが実際は、現地情勢によって一時中断されるようなことがありました。例えば軍事政権や、特に 1980 年代から 90 年代初頭にかけての治安悪化によって援助が難しかった期間があります。それと同時に経済不況に陥っていた部分もあったので、なかなか有償の支援が難しい状態にはありました。

ペルー国内の ODA に関する事情としては、ペルーのインフラを自身で構築できていなかったことがあります。ペルーは大きくアマゾン地帯とアンデス山脈のシエラ、海岸地帯のコスタと言われるところに分けることができます。1950 年代までは人口の多くが山脈地帯、つまりシエラ地方に集中していました。1950 年代以降に関しては、外国投資などにより、経済が発展するにあたってどんどん人口が山岳地帯のシエラから海岸地帯へと流れ込むようになりました。しかしそれを支える基礎インフラが全く整備されずに、特に首都のリマやその周辺が大きく発展していきました。それに伴って、まだまだ水道が通っていないところであったり、水を供給するシステムが整っていないという状況が今現在続いているという状況であります。

また日本と類似して自然災害も定期的に発生します。エルニーニョ現象や地震が発生しているところを見るとまだまだ支援が必要な部分も確かにあります。とはいえ、基本的な支援というのがリマを中心にされている部分が大いにあるため首都と地方を均等に支援していく必要が、昔からの課題ではありますが、今後も重要になってくるだろうと思います。それに伴って、国内の貧困格差におい

ても改善をしていく必要がペルーにはあります。私の発表は以上となります。ありがとうございました。

## 阪本（司会）

ありがとうございました。小波津さんは国際学部から国際学研究科の博士課程まで宇都宮大学に所属しておられたというご紹介をし忘れました。改めてありがとうございました。最後のご発表になります。Sueyoshi Ana 先生よろしくお願いします。

## スエヨシ・アナ（宇都宮大学国際学部准教授）

Please allow me to give me my brief presentation in English. Ana Sueyoshi, from the Faculty of International Studies at Utsunomiya University. I was in charge of writing a column on Latin Americans of Japanese origin and Japanese ODA. As many of you know, Latin America is the current home to the world's largest population of overseas Japanese or Nikkeijin. The association of Nikkei and Japanese abroad estimates that there are almost 4 million Nikkeijin in the world, and that approximately half of them are Brazilians. There are other Latin American countries that also host large populations of Japanese ancestry, such as Peru, Argentina, Mexico, Bolivia, and Paraguay.

**スエヨシ・アナ（宇都宮大学国際学部准教授）**

**ラテンアメリカの日系人と日本のODA**  
**Latin Americans of Japanese origin (Nikkeijin) and Japanese ODA**

日系人人口	380万（100 %）
ブラジル	190万（50 %）
日本	25万（6.6 %）
ペルー	10万（2.6 %）
アルゼンチン	7万（1.7 %）
メキシコ	2万（0.5 %）
ボリビア	1万（0.3 %）
パラグアイ	1万（0.3 %）

出典：海外日系人協会

**日本とラテンアメリカの関係構築に日系人の貢献がある**

- ・ 19世紀末から70年代 民間企業(貿易・投資)+移民
- ・ 80年代以降 ODA+民間企業+移民

**JICAの日系人支援は新しい時代へ**

- ・ 次世代の人材育成のための支援  
日本招へいプログラム  
学生のためのプログラム
- ・ 日系社会と地域社会への支援  
日本語教育・保健・福祉分野へのボランティア派遣  
現職教員特別参加制度  
日本国内の大学・企業・地方自治体等での研究者受け入れ

**日系人とODA、日系人の役割**

- ・ ODAの援助受取者
- ・ ラテンアメリカの国々に日本の理解者を育成する
- ・ ODAのアクティブな手段として

37

Since its beginnings over a century ago, Japanese immigration has always played an important role in Japan and its Latin American counterparts' bilateral relations. As trade and investment from Japan were redirected to other closer geographical areas in the 1980s, the economic ties led by the private sector between Japan and Latin America weakened. However, the Japanese immigrants and their descendants have been a constant factor in the Japan-Latin America

relation, which has been strengthened by the migration of Nikkei Latin Americans to Japan by the late 1980s.

On the other hand, the Japanese government through ODA has filled the space left by the private sector retreat. Since then, ODA has played a significant role as a promoter of partnerships with the private sector in trade, finance, and technology.

Counting on overseas Japanese communities in Latin America is an advantage for both regions when it comes to embarking on new projects. Being aware of the role of Nikkeijin communities in Latin America, JICA has developed several programs aimed at supporting and enhancing the collaboration and relations with the overseas Japanese and their descendants.

Let me present here some of those programs. One of them consists of educational initiatives for the next generations, through which junior high school, high school, and university students are invited to Japan, so they can acquire a better understanding of Japanese culture and Japanese society, and build their identity as Nikkei. JICA also offers scholarships to private students in Japan. Through other programs, JICA supports overseas Japanese in their countries of residence in different areas, such as education, health, and welfare, by sending Japanese volunteers and providing financial and technical aid. Also, there is a Special Participation Program for school teachers for Nikkei communities, in which Japanese teachers are dispatched to schools. Those teachers upon their return to Japan are expected to assist with the education of Nikkei children who are living in Japan.

One of the last programs I would like to present here is hosting Nikkei trainees at the proposal of universities, local governments, and private enterprises in Japan. This program aims to promote nation-building in their own countries, and also bilateral exchange between Latin American countries and Japan.

Finally, I would like to emphasize the potential role of overseas Japanese in the future relations between Japan and Latin American countries through ODA. So far, Japan-born or Japan-raised Nikkeijin who have moved to Latin America, most of them to Brazil or Peru, due to their Japanese language proficiency and first-hand experience of Japanese culture and Japanese society, have participated in several JICA projects, mostly as translators or interpreters. As those Nikkei returnees graduate from Latin American universities, they could play a more active role in ODA promotion as engineers, researchers, technicians, teachers, and so forth. Once, ODA recipients, Nikkeijin can become active players and promoters of Japanese ODA. Thank you very much.

#### 阪本（司会）

スエヨシ先生ありがとうございました。日系人と ODA ということでかなり特徴のあるコラムだったとます。ありがとうございました。